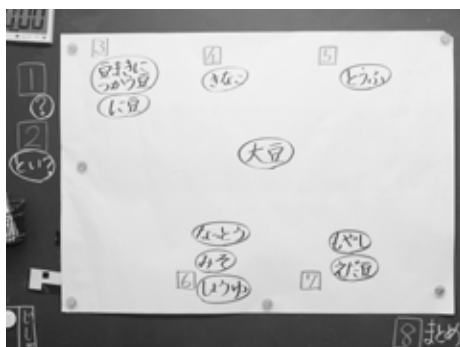




上/最後に模造紙の左横に1・2、右下に8と書いて、文章のまとまりを俯瞰できるようにする。
右/デジタル教科書の画面を指さしながら、食品名を答える児童。全員の視線が、画面に集中する。



食品名を発表する

「今日は、大豆が何に姿を変えたのかを発表してもらいますよ。どんな食べ物かここに書かれていたかな」。青山先生はそう、

指導計画(全6時)

時	学習活動
1	・題名から「問い」を作り、内容に興味をもつ。 ・全文通読し、大豆が姿を変えた食品名に印を付ける。 ・調理の言葉に興味をもち、調べる。
2	・全文通読後、印を付けた食品名を発表する。 ・食品名をマップ状にまとめる。 ・全体構成(初め・中・終わり)を捉える。
3	・「初め」の第1・2段落の内容(大豆とダイズの違い)を読み取り、それぞれの段落の役割を理解する。 ・「中」の事例が「工夫」で整理されていることを理解し、第3・4段落の事例の内容を読み取る。
4	・第5段落の事例から、作り方が書かれていることに気づく(豆腐の写真だけ3枚セットであることに着目させる)。
5	・第6・7段落の事例の内容を読み取る。 ・「これらのほかに」の事例は、大豆でなくダイズであることを理解する。 ・第8段落の「まとめ」を読み取る。
6	・事例の順序性について、根拠を明らかにしながら自分の考えを述べる。 ・つなぎ言葉の使い方を理解する。

※第3時あたりで単元後半の活動(書くこと)を提示する。

言って、教室前方のスクリーンにデジタル教科書を映し出した。前時、児童が自分の教科書に印を付けた食品を発表させ、全体で共有するところからのスタートだ。

児童の手が元氣よく挙がる。その様子か、

ら、自分が見つけた食品を発表したいという強い気持ちがあがえる。指名されたら前に出て、デジタル教科書を指さしながら食品名を答える。先生はそれに合わせて、画面上に緑色の線を引いていく。九つの食品が、テンポよく確認されていく。

途中、先生は、「いる」「にる」など、調理の言葉が出てくるたびに小さな模造紙に書き留め、意味を確認していった。児童の語彙を広げ、単元後半の「書くこと」で生かそうとする意図があるのだろう。

食品名をマップで整理する

「では、みんなで、大豆が姿を変えた食べ物確かめていきましょう」と言って、青山先生が取り出したのは大きな模造紙。ここからは、大豆から作られる食品を、模造紙上のマップに整理していく。模造紙を使うのは、この後の授業でも、必要なときに貼り出して確認できるようにとの工夫だ。児童は先生が書くのに合わせて、自分のノートにマップを書き写していく。

文章に出てくる食品の順が確かめられるよう、「いちばん最初に出てきたのは何だった?」と、児童に問いかける青山先生。同時に、それが書かれている段落も確認して

いく。食品名は、デジタル教科書で使った色に合わせて、緑色の線で囲む。児童たちは、張り切って食品名と段落番号を答えていく。

そんななか、第六段落の「なつとう」「みそ」「しょうゆ」を書き入れようとした先生の手が止まった。そして、こんな言葉を投げかける。「ここは、食べ物か三つもある。二つの段落もあったね。いつでも一つの段落に一つじゃないんだ」。この後、「中」の段落が食品でなく、工夫ごとになっていることを押さえていくための意識づけをするつもりだったようだ。

しかし、それを聞いた児童たちは、口々に自分の意見を言い始めた。教室全体に活発な声があふれる。そのなかで先生は、「一つの段落に一つだと、九段落になる」という発言を取り上げ、こう返した。「九段落? 食べ物の数はいくつ? 段落の数はいくつだったかな。最後まで書いた後、数えてみますよ」。児童たちの注意は、食品と段落の数に向けられていく。

第七段落の「えだ豆」まで書き入れると、全員で模造紙を見ながら、食品数と段落数を数える。食品数は九、段落数は五。二つの数が違うことを確認した後、先生は「じゃあ、この文章は全部で五段落なんだね」と



調理の言葉は、貼ってはがせる「ふせん模造紙」に書いて好きなところに貼って見せられるようにしておく。

○授業を終えて——青山先生より

教材分析の段階で、子どもたちにとってのこの文章のおもしろさは、「大豆が何に姿を変えるのか」ということだと考えました。そこで、まずは食品だけを取り出してマップに整理することにしました。子どもの「知りたい」という思いに沿ったので、マップでの整理に必然性が生まれ、「教師から与えられた作業」にならずに済んだのではないかなと思っています。また、このマップは、単元後半の「書くこと」でも生かすことができます。

続けた。一斉に「違うー」と返す児童。「どうして違うの？」と、青山先生。一人の児童が答える。「最初の『問いの文』と、最後の『まとめ』も必要だから」。それを聞くと、先生は「初め」と「終わり」が必要なんだね」と言いながら、模造紙の外側の黒板に、一・二・八と、段落番号を書き足した（前ページ写真参照）。模造紙の部分（第三〜七段落）が「中」、その前（第一・二段落）が「初め」、その後（第八段落）が「終わり」。児童は、視覚的にもしっかりと捉え、確かめていた。

知的好奇心が刺激されるから、内容や説明の工夫をしつかり読もうとする。そして、その説明の工夫が分かったから、自分も書きたいと思う。この流れを意識して、単元を組み立てました。子どものモチベーションを考慮に入れることは重要です。「子どもは、どんなことに気づくだろう」「子どもに、どんな学習活動をさせようか」。私はいつもそれを大切にしながら、教材研究に取り組んでいます。

その後、第八段落が文章の「まとめ」であることを確認したうえで、「第一・二段落に『問いの文』があるのかな？ ここにはどんなことが書いてあったか、次の時間に考えていきましょう」と、青山先生。最後に、調理の言葉を書いた模造紙を見せながら、「お料理に使う言葉も、これからもっと探していこうね」と付け加えて授業は終了した。「もう見つけたよ！」という児童の言葉から、大豆が姿を変える不思議への大きな関心が感じられた。

■学習指導書のご紹介

学習指導書「『読むこと』の授業をつくる」（文学編・説明文編）では、青山由紀先生と相田萬理子先生（奈良女子大学特任教授）の教材研究の方法を紹介しています。監修は、高木まさき先生（横浜国立大学教授）。教材研究の際には、こちらもぜひ活用ください。

- ・「読むこと」の授業をつくる—文学的な文章編
 - ・「読むこと」の授業をつくる—説明的な文章編
- （いずれも1〜6年全1冊／本体3,500円＋税）

